氷紋

渡辺淳一

講談社

氷紋

一九七四年六月一六日　第一刷発行
一九七四年十二月二十日　第八刷発行

著者　渡辺淳一
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号一一二
電話　東京（〇三）九四五―一一一一
振替　東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社若林製本工場

© Jun-ichi Watanabe 1974 Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります　（文1）

目次

第一の章　通夜の回想　7
第二の章　揺影　37
第三の章　邂逅　69
第四の章　残滓　95
第五の章　雪の襞　135

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第六の章　晩冬　161
第七の章　白き傷　193
第八の章　雪解け　221
第九の章　かげろう　253
第十の章　亀裂　273

装帧/丹阿弥丹波子

氷紋

第一の章　通夜の回想

「昨夜、久坂に逢った」
夫の敬之が有己子に告げたのは、朝の食事の終る時だった。
今年から小学校に入った一人娘の真紀は学校に行ったあとで、ダイニングキッチンには夫の敬之と妻の有己子の二人だけだった。
「久坂さんが？」
このごろやや肥りすぎの敬之は、朝はトースト一枚と野菜サラダしか食べない。いまそのサラダを食べ終り、テーブルの上の新聞に目を向けながら敬之はうなずいた。
「どこでですか」
「病院に来た」
有己子は突然いいだした夫の真意を探るように、新聞に目を向けている敬之の横顔を見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

た。
「札幌にお戻りになったのですか」
「いや、そうではない」
「じゃあ、お遊びに」
「いや……」
敬之は煙草に火をつけてから、もう一度新聞へ目を向けた。
有己子は夫のもの思わせぶりな態度に、少しばかり苛立っていた。
敬之のもののいい方はいつもこうであった。自分から話しかけておきながら返事を渋る。答えるときも眼は大抵テレビか新聞を見ている。
だが、だからといって話に心を向けていないわけではない。眼は他を見てつまらなそうに受け答えをしながら、その実、神経は鋭く話相手の方へ向けられている。いまもそうだと有己子は感じた。
「なにかお仕事ででも」
有己子は焦る気持をおさえて、できるだけ平静な声で尋ねた。
「そろそろ、札幌へ帰ってきたいのかもしれない」
「そろそろ……」と有己子は口のなかでつぶやいた。
久坂利輔が札幌の大学病院を離れ、日本海に面した天塩という町の病院へ行ったのはまだ有己子が二十二歳の時であった。それからまさしく七年の歳月が経っている。

「で、こちらへお戻りになるのですか」
「そうではない」
敬之は新聞を置き、コーヒーを求めた。有己子はそれ以上きき出す勇気を失って、流し台に立った。
湯が沸き、ポットからコーヒーの香りが洩れはじめた時、再び敬之がいった。
「昨日の午後、突然、医局へ来たのだ」
有己子が振り返ると、今度は敬之は食堂の椅子に坐ったまま雪のちらつく窓を見ていた。
「御一人で」
「そうだ」
コーヒーを二つ淹(い)れ、一つは敬之に一つは自分が持って、有己子は夫と食卓をはさんで坐った。
「こちらへ戻りたいということは、その時、おっしゃったのですか」
「いや、あいつは相変らずなにもいわないが……」
「じゃあ、どうして……」
「あんな田舎町に七年もいたら、田舎呆(ぼ)けしてしまうだろう」
いってから敬之は熱いコーヒーを啜(すす)った。
久坂が札幌へ戻ってくるということは、きまったことではなく、夫が久坂の気持を察し

ていっているだけらしい。
「久坂さん、時々札幌に見えているのですか」
「今度は二年ぶりだといっていた」
「じゃあ、やはりなにかご用で」
「お袋が死んだらしい」
「お母さんが……」
有己子は驚いて顔をあげた。
敬之と久坂は札幌の大学の医学部の同期生であった。しかも大学を卒業したあと、二人とも同じ第一外科の医局に入っている。一方はそのまま大学に残り、一方は地方の病院へ移りはしたが、同期で同門という絆はきれていない。その友人の母親が死んで、友達が田舎から出てきたというのに、いまごろになってそのことをいい出す夫の神経が有己子にはわからなかった。
「なんのご病気で？」
「狭心症だといっていた」
「じゃあ、突然……」
「そうらしい」
「こんなお正月早々に……」
有己子は溜息をついたが、敬之はまた新聞に眼を向けた。

「久坂さんのお母さんはずっと札幌にいらしたのですか」
「手稲に、妹さんと一緒にいたらしい」
手稲は札幌から車で西へ三十分ほどの海に近い郊外である。
「じゃあ、お参りにいかなければ」
「今夜、通夜なのでいってくる」
「背広は」
「黒いから、これに喪章をつけるだけでいいだろう」
「お通夜は何時からですか」
「六時だ」
敬之ははじめからそのことをいうつもりだったようである。それをこのようにもってまわったいい方をした時は、大抵含むところがある。有己子は警戒の目を夫へ向けた。
「医局ではもう久坂を知っているのはあまりいないので、俺が代表して行ってくる」
「ご香典は」
「医局で出すことになっているからいいだろう」
「でもそれは医局としてでしょう、やはり個人としても出さなければ」
「そうかな」
「そうよ、同期でいろいろお世話になっているじゃありませんか」
「いや、久坂に世話になった覚えはない」

「そんな……」
有己子はもう一度声を呑んだ。
この人は一体、なにを考えているのか。
敬之が久坂の世話になったか否か、それは男だけの世界のことで有己子にはわからない。しかしそれがどうであれ、少くとも同期生であれば些少なりとも包むべきではないか。
「五千円くらいでもお包みしたら」
納得したのか敬之は立上り、洋服箪笥のドアにある鏡に向った。
「紙袋は医局にありますか」
「あるだろう」
鏡の前でネクタイを締めながら敬之がうなずいた。
大学病院の助教授という堅い職業のせいもあるが、敬之は白いワイシャツに高価だが地味な感じのネクタイしかつけない。
「出かける」
ネクタイを締め終ったところで敬之がいう。
有己子は慌てて箪笥の抽斗から新しいハンカチを取り出すと、テーブルの上にあった煙草とライターを手渡した。それから玄関へ駈けて行って靴を磨く。
敬之には突然「行く」と云い出して有己子が慌てるのを楽しむようなところがある。い

まもたちまち鞄を持ち玄関に立って、靴を磨いている有己子を見下している。
「夕食はいらない。薬屋の招待で『はまなす』で食事をする。少し遅くなるかもしれない」
「わかりました」
敬之は紺地に黒い縞のあるオーバーを着て、中折を目深にかぶる。
大学までは電車の停留所で三つ先で、夏の間はほとんど歩くが、雪のある間は電車に乗ることが多い。
助教授といっても医局で毎朝、九時に打合せ会があるので八時半には家を出る。
「じゃ」
「いってらっしゃい」
有己子は上り口で軽く三つ指をつく。古風な仕草だが見送るときにそれを欠かしたことはない。
結婚して半月後に、敬之は改まって有己子にいったことがある。
「子供の時から、俺のお袋は親爺の出がけには必ず三つ指をついて送り出していた。親爺が死んでからは、お袋は今度はそれを俺にしてくれた。古くさいと思うかもしれないが、そうしてもらうと一日が落ち着く。だから君もこれだけは守ってくれ」
父が書道家で二人の女姉妹の末っ子に生れた敬之は、男としての権威を充分に認められて育ったらしい。大学への送り迎えに妻に三つ指をつかせて満足するのもそれの名残りか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.